

十日、東京新聞社の同志も、同じく八時間三職務を要求して斥けられ、植字工、文運工全部退場した。十三日、やまと新聞社の植字工、文運工、印刷工全部、及び東京朝日新聞社の文運工全部も亦、同様に退場した。

然るに、噫、前年とは其の戦路を異にした今回の此の再撃も、今や又、再び惨敗の悲況に陥らんとしてゐる。新聞社は、前年吾々が喝破した如く、純然たる資本家である。しかも、自ら社会の木鐸と稱して、常に労働問題を高唱し、資本家の横暴と悪辣とを絶叫しつゝ、實は其の最も横暴なる、最も悪辣なる資本家である。彼等は、事あれば直ちに、平素は互に相嫉視して悪辣極まる競争に従ひつゝ、ある同業者等と、堅く結束する。そして、其の社会問題上の多少の知識——噫、恐るべき知識——を利用して、極力労働者を偽瞞し、誘惑し、高壓する。

彼等は、何よりも先づ、自覚労働者の解雇に努めた。報知は三十八名、日々、讀賣は共に十二名、朝日は二十四名、事を擧ぐると共に直ちに檢査されて黒表を廻付された。同時に彼等は、官憲の力を借りて、三十餘名を檢束せしめ、同志の主なるものに總て尾行巡査を附かしめ、猶數十名の警官をして各社の工場の保護警衛に當らしめた。平素、労働者の唯一眞實の味方と稱しつゝ、あつた東京毎日新聞の如きも、職工の要求提出に會ふや、直ちに重なる職工二名を解雇した。

吾々にはもう殆んど手の出しようがない。斯くして吾々は、遂に一日の新聞をも休刊せしめる事が出来ず僅かに萬朝報社の八時間二部制の即時實行と、時事新聞社の來年一月を期しての實行契約とを得た。それで、一兩日中に各社の此の罷工を中止するの已むを得ざるに到らんとしてゐる。

吾々は二たび惨敗の苦い経験を嘗めなければならぬ。三たび又起ち上る準備の爲めに、二たび又こゝに降伏しなければならぬ。新聞聯盟の堅壁は、吾々の正直な正攻法によつては、到底陥るべくもない。吾々は更に奇襲法を講じなければならぬ。茲に、再度の惨敗の頭未を記して、一般労働者諸君に事の真相を報じ、重ねて同情者諸君及び後援者諸君に深く恥ぢ且つ深く謝する。

大正九年十月十五日

新聞印刷工組合 正 進 會

宣

『三たび又起ちあがる準備の爲めに、二たび又こゝに降伏しなければならぬ。』

去年の十月十五日、僕等は再度の惨敗頭未を諸君に報じて、涙をふるつて宣言書の終りに斯う書きつけた。

『三たび又起ちあがる準備の爲めに、二たび又こゝに降伏しなければならぬ。』

去年の其後の二ヶ月餘りは、惨敗のあと始末に暮らした。現にまた、當時の犠牲者、布留川、北浦、伏下、生島の四君は、報知新聞社活字臺顛覆の爲めの、業務妨害、器物毀棄の罪者の下に、毎日入獄の時を待つてゐる。けれども年は改まつた。僕は、本當に、『三たび又起ちあがる準備』に取りかゝらなければならぬ。

一昨年、好景氣は、一方無暗に労働争議をたきつけると共に、其の運動を幾分かお祭騒ぎに陥れた觀があつた。が、昨年春の不景氣以來、あれ程盛んに見えた労働運動が、忽ちにして火の消えたやうになつた。

日本の労働運動は、確かに、一時形の上では静まつた。けれどもそれは、更に確實な足どりで進まん爲めの、本當に眞剣な運動に進まん爲めの、暫くの間考へのみに過ぎなかつたのだ。

現に其の、本當に眞剣な、謂はゆる赤化された運動が、そろそろ頭をもたげつゝある。僕等は、最近の日本の、此の形勢に應せんとするものである。そして年頭先づ、こゝに僕等の大會を催して、各新聞社に對し八時間労働公約の實行催告狀を發し、これを以て三たび又起ちあがらんとする最初の烽火たらしめんとする。

大正十年一月二十日

新聞工組合 正 進 會